
ラクリマ

～ ライルの想い～

いず魅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラクリマ 〽ライルの想い〽

【Nコード】

N2974U

【作者名】

いず魅

【あらすじ】

ライルとウエニマスの馴れ初め話です。

「だめー！ツ、いけないっつー！！」

アイツの悲鳴が鼓膜を震わせたが、俺は退く《ひく》気なんざ毛頭なかった。こ

の状況でアイツを守ってやれるのは、たぶん俺しかいねエと思ったからだ。

パルテノスのラルベール・ブラドラーが、煌く粒子となって射出口に収束されて

いくのをモニタに認めて、俺はふと眉根を寄せた。

ほんの微かなラクリマの残り香――――。

そうか・・・アイツ――ユミールをレイオードに乗せた時に移ったんだな。

そのひどく懐かしい香りは、甘くてせつない記憶を呼び覚ますには充分過ぎた。

遠い日にすべてを賭けて愛した女を最後まで信じてやれなかった後悔の念が胸を締

めつける。どうして守ってやれなかったんだろう。憎んで憎みぬいて永劫ともいえ

る時空を彷徨ってしまった自分が情けなくて許せなかった。償いた
い相手は、もう

いない。ならば俺のすべき事はたったひとつ。そう、ウエニマス・
・おまえの忘れ

形見を守ること――――

聖地で錬金学士として研究に従事している弟に逢うために、俺は
その日、初めて

その地を訪れた。

レニスのヤツは《ゼ〃オード》とかの研究に携わっているらしい。
以前何度か誘

われたが、俺にゃあ錬金学士なんざ性に合わなかった。それでもあ
んまりしつこく

誘うので、渋々ながらも足を運んだというワケだ。

聖地のほぼ中央の工房に着いた俺をレニスは笑顔で迎えてくれた。

「やっと来てくれたんだね、兄さん」

「おめエがあんまりしつこいからだ」

「あはは・・・なんだ、研究に興味を持ってくれたワケじゃないんだ」

俺の言葉にレニスは苦笑する。

「ま、兄さんらしいけどね」

「あら？ レニスじゃない」

背後から突然かけられた声に、俺とレニスは同時に振り向いた。

「ウエニマス」

胸のあたりまできれいに伸びたつややかな銀髪の美女が、柔らかな笑みを浮か

べて佇んでいた。アメジストを彷彿とさせる瞳に俺の目は釘付けになった。

「・・・さん？ 兄さんってば・・・」

俺はかなりの間、阿呆のように立ち尽くしていたんだろう。レニスが呆れたよう

にため息をついている。

「あ、ああ・・・」

「何ボケっとしてるんだよ？ ウエニマスに見惚れてた？」

「バ、バカ言うんじゃないよ!」

からかいを含んだヤツのセリフについつい声が大きくなった。目の前のウェニ

マスは口に手を当ててくすくす笑っていた。

・・・たく、何だっただよ。レニスの言葉は認めたくねエが凶星だった。理

由? ンなモンはねエが、俺はたぶん、その瞬間ウェニマスに魅かれていたんだと

思う。

「あ・・・と、紹介するね。こちらはウェニマス博士。僕と同じ《ゼニオード》研究プ

ロジェクトに従事してる。ウェニマス、こっちはライル。僕の兄さんなんだ」

「よろしく、ライル」

そつと差し出された華奢な手を、俺はためらいがちに握った。

爪の先ほど興味がなかった《ゼニオード》の研究に俺が関わったのはそれから

すぐのことだった。まったく人の運命なんざどこでどう変わるかわからねエもんだ

など、自分の変化を感じつつ思った。日が経つにつれて研究も面白くなってきた

が、何よりも俺はウエニマスに夢中になった。

レニスのヤツに冷やかされながらも俺はいつもウエニマスの姿を目で追っていた。

た。

誕生日に工房の裏手の丘に呼び出した俺に、ウエニマスはいつもの柔らかな笑み

を浮かべ小首を傾げた。

「話って何？ ライル」

「あ・・・ああ」

情けねエことに焦がれてやまない相手を前に、俺の頭は見事に真っ白になった。

言葉が浮かばない・・・・・・口が鉛のように重い・・・・・・。

つくしょう、何やってやがるんだっつ。

「ライル？」

さりげなく先を促されて俺はようやく腹を括った。

「おう。・・・今日、おまえの誕生日だろ？」

「まあ、覚えていてくれたのね」

「ああ、それで俺、何かプレゼントしたくて・・・その、いろいろ考えたんだけど

な。気の利いたモンが浮かばなくて、それで、これ・・・」

顔から火が出る思いで、俺は背中に隠していた右手を半ばヤケクソのように差し

出した。その手の中には一輪の白い花が揺れている。丘のはずれの方に咲いていた

のを摘んできたヤツだ。あまりの照れ臭さに顔を逸らしたまま伸ばした手に、ウ

エニマスの柔らかな手がそつと触れる。

「きれい・・・ラクリマ、ね」

「そ、そうなのか？」

「うふふ、知らなかったの？」

「知るか」

「うれしいな、ライルにプレゼント貰えるなんて」

無邪気に笑うウェニマスは俺はとっさに抱きすくめていた。

「ライ・・・ル？」

淡い香水の香りが鼻腔に拡がった。

「好きだ」

「！」

「はじめて逢ったときからずっと気になってた。なあ、俺と一緒に
- - - - -」

「ライル」

俺の腕を振り解くと、ウェニマスは数歩後ずさった。

「知ってる？ 私、あなたより年上なのよ？」

「それがどーした？ カンケーねエじゃねーか」

そんなバカげたコトで拒絶されるなんて冗談じゃなかった。俺は
ウェニマスの細

い腕を掴んで、少々手荒に引き寄せた。

「俺のこと・・・どう思ってる？ 俺じゃあダメなのか？」

「うっん、突然で・・・すこし混乱してる。ねえ」

ウエニマスはやっぱり俺を制すると、

「来年の誕生日にまたこの花を貰えるかしら」

「あ？ ああ、いいけどよ」

「うん、待ってる」

「お、おい。さっきの答えはどーなんだよ？」

「さあ、どうかしら」

鈴を転がすように笑いながら、呆然としている俺の腕を擦り抜けて、ウエニマス

は小走りに駆けて行った。

（おい・・・んなのアリかよ？）

必死の思いで告った方の身にもなりやがれてんだ。

俺はウエニマスの後ろ姿を見送りながら軽く舌打ちした。

それから毎年、俺はウエニマスの誕生日にあの花を贈った。花は年を追うごとに

増えてゆき、三年目には両手に抱えるほどの花束をプレゼントする

ことになった。

一緒に暮らそう……ごく普通にそんな言葉が零れた。
ウェニマスは今度はノ

ーとは言わなかった。黙って俺の肩に顔を埋めたアイツを、俺はきつく抱きしめ

た。

ラクリマの花言葉を知ったのは、それからまもなくのことだった。

ラクリマの残り香に呼び覚まされた遠いあの日の記憶を彼方に追いやると、俺は

バリアを張ったままパルテノスの懷に飛び込んだ。

（最後まで父親らしいこと、させてくれよな）

シャルルの悲鳴にも似た声をどこか遠くで聞きながら、俺はためらうことなく

自爆スイッチに手を伸ばした。

N
D

E

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2974u/>

ラクリマ ～ライルの想い～

2011年10月9日07時58分発行